世田谷区誌研究会 会　報

令和8年9月号

NO66

編集人　野岸敏雄
天海敏彦

連絡先：kushiken0817@yahoo.co.jp
ホームページ：https://setagaya-kushiken.jimdofree.com/

九月になると、夜空の月が気になります。今年の中秋の名月は九月二十五日。昔の暦では八月十五日にあたります。ところが今年は、満月になるのは二十七日です。十五夜と満月が必ずしも同じ日ではないというのも、月と暦の面白いところです。

中秋の名月（十五夜・芋名月）9月25日
満月　9月27日
十三夜（豆名月）　10月23日



日本人は、いったいいつ頃から月を眺めてきたのでしょうか。
　平安の昔、月は歌人の心を映すものでした。阿倍仲麻呂は、遣唐使として長安に渡り、故郷を遠く離れて見る月に、奈良の春日の三笠山を重ねました。
　「天の原ふりさけ見れば春日なる　三笠の山に出でし月かも」
　同じ月を見ても、そこに故郷を思う人がいます。
一方、藤原道長は、
　「この世をば　我が世とぞ思ふ　望月の　欠けたることも　なしと思へば」
　と、満月を自らの栄華に重ねました。月は、望郷の月にもなれば、人生の絶頂を映す月にもなったのです。

「世の中に月見る月は多けれど　月見る月はこの月の月」という言葉もよく知られています。菅原道真の作とされることがありますが、実際には確かな作者は分かっていません。それでも、「月はいくらでもあるけれど、やはりこの月こそ格別だ」という気持ちは、時代を越えて私たちにもよく分かります



そして江戸時代になると、月は貴族や歌人だけのものではなくなります。庶民もまた、月を楽しみました。
　小林一茶には、
　「名月をとってくれろと泣く子かな」
　という有名な句があります。空に大きく輝く名月を見て、「あのお月様を取って」と泣く子ども。大人には遠い天体である月が、幼い子どもには手を伸ばせば届きそうに見える。その素朴な情景に、江戸の庶民の暮らしが感じられます。

江戸の月見は、句や歌だけではありません。すすきを飾り、団子や芋などを供え、秋の収穫を祝いながら月を眺める風習も庶民の暮らしの中に根づいていきました
さらに興味深いのが「月待ち」です。
　江戸では、決まった月齢の日に月の出を待って拝む風習がありました。その中でも高輪から品川の海辺で盛んだったのが「二十六夜待」です。旧暦の一月と七月の二十六日の夜、月の出を待ち、その光の中に阿弥陀・観音・勢至の三尊が現れると信じられていました。特に七月二十六日の夜は盛大で、高輪の海岸には多くの人が集まり、屋台や料理屋が並び、酒食や歌舞音曲まで楽しんだといいます。歌川広重の「高輪廿六夜待遊興之図」や、『江戸名所図会』にも、その賑わいが描かれています